

(J. Sugimoto, Mai. 31, 1927, Type in TI), ibidem Nagata alt. 20 m in mossy rock on streamside (T. Yamazaki, Jan. 3, 1963), ibidem cult. in Tokyo, flower white (T. Yamazaki, Jun. 7, 1965). Ryukyu: Isl. Okinawa (Y. Tashiro, Mai. 1887). Formosa: Pref. Taipei; Urai (E. Matuda, Jul. 24, 1918, no. T226), 大屯山 (T. Sato, Oct. 26, 1935, no. 101), 阿玉山 (B. Hayata, Mai. 5, 1916). Pref. Taoyuan; Remogan (B. Hayata, Mai. 7, 1916). Pref. Ilan; 大平山 (Y. Yamamoto, Sept. 1, 1925). Pref. Nan-tow; 溪頭 1300 m (T. Yamazaki, Sept. 2, 1969). Pref. Chia-yi; 阿里山 (G. Nakahara, Nov. 1906. B. Hayata, Apr. 12, 1916), 阿里山-東埔 2200 m (T. Yamazaki, Sept. 9, 1969).

(東京大学理学部植物学教室)

○枕の詰物 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Packings of pillow

我々の生活環境が均一化し、廉価で便利な身の廻りの規格品が大量に出まわると、その反面に遠い祖先から受継がれた自然物利用の手づくり品に心惹かれるものである。これは必ずしも我々の郷愁のみではなく、自然物にはそれぞれ棄て難い味があるからである。早い話が、人間一生の3分の1は御厄介になっている寝具のたぐいである。これがすべて高分子化学の産物のみを材料としたならば、恐らく味気なく、健康にも宜敷いとは言えまい。

ここに奇特な人があり、寝具の改良に真剣に取り組む、先ず枕の詰物から研究をはじめた。昔から頭寒足熱といわれているが、陶枕、木枕、氷枕のたぐいは一般的ではなく、やはり適当な材料を詰物にした枕を科学的に研究して庶民の役に立たせようとの趣旨である。我国で広く用いられているソバ殻は近頃大分払底の由。考えるまでもなく隣国の中国人は寢室には大いに考慮を払っている。そこで香港から、先ず枕の詰物に使用しているものの見本を取寄せた。その奇特な人と申すのは某布国屋さんであり、この材料の鑑定を私のもとに求めて来られたのは薬学の山下泰蔵老である。さてこれを見一すると豆科植物の小葉か、日本のコミカンソウの小葉を思わせる。説明によれば南支に大量に産し、僅少の芳香もあり、枕には打ってつけの材料という。折柄来訪の久内老の意見をただしたところ大体同意見であり、一応中国植物誌をしらべる必要があるといわれた。しかし次いで山下さんより連絡があり枕に附属した説明書にフランチス・エンブリカとある由。これですべて解決した。机上の石井勇義氏園芸大辞典より次に略記する。

アノマロク (菴摩勒) 一名油柑 *Phyllanthus emblica* L. (たかとうだい科) 熱帯アジア原産、中国南部、台湾では栽培、観賞用、又は果実を生食又は漬物とし、材を家具材に用いる。葉および樹皮はタンニンを含む。高さ 10 m 余の落葉小喬木、葉は線状長楕円形、鈍頭、長さ 2 cm、花は小輪で黄色。

さて日本ではどんな材料が用いられて来たのであろうか。ソバ殻、粳穀、パンヤなどが大部分であると思われるが、米作が普遍的でなかった昔の生活では、それぞれの地域の産物が用いられたことであろう。昨年奥州の平泉に藤原三代の跡を尋ね、宝物館に入って目についたのは泰衡使用の枕であった。これは稗(ヒエ)のたぐいであった。当時主食にしていたものであろうか。久内老によればギシギシの実がよろしいという。スガモが使用されている地方もあるという。また特に次の報告を寄せられた。「茶殻を用いることはかなり広く分布している風俗で、私の家内も、幾瀬君も知っておりました。あれにジャスミンかマイカイの乾燥花を極く少量を混じて作った枕でねたら華胥の夢を見ること受合いです。これはたしかに流行します、いかが」。

私はどこかでアズキ枕を用いたことがある。重厚で適当な冷感も覚えた気憶がある。記録によれば秩父の山中ではサルオガセ枕が使用されていた由である。こういう資料を一般の読者諸氏からお寄せ願いたいと思う。もし詰物の工合によって夢がコントロールされるならば、これを喜ぶ者は只に布団屋某氏のみではなからう。傍らに声あり、「安直には手枕、望むならば美人の膝枕を」と茶化すこと勿れ。

以上の原稿を書き上げ後、既に 2-3 の投書に接した。たとえば山下さんからは「黄楊とか、柚、蜜柑などの葉は如何でしょうか。やって見ようと思って居ります。ヨーロッパではクロイテルキッセンと称し牧草や薬草を枕に入れ、痛風などの治療に用いたり、実際の枕にも用いて居ります。次に油柑ですが、本草書には餘柑の別名が記されて居りますが、餘と油との類似から来た転化ではないかと存じます。餘柑子の方が古い名称かと存じられます」と。また別人より、ウブサラのリンネ博物館にあるリンネ使用の枕や、パリーのルーブルにあるマリーアントアネットなどルイ王朝時代の貴人使用のものなど調べたら如何との勧告があった。どうも是以上深入りするとまくらさがしの異名を受けるおそれもあるので、このへんで打ち切ります。(国立科学博物館)

□The Pocket Oxford Dictionary, ed. 5., with A Supplement of Australian and New Zealand Words. Oxford University Press, London, 1969. M/S \$ 8.00; HK \$ 13.50; ¥ 900. 今さら著明な英英辞典の紹介は場違いのような気もするが、巻末の 32 頁に 1,100 語に及ぶ、オーストラリアとニュージーランドの特有の語の付録があるのが、大いに役に立つので紹介しておく。近頃ニュージーランドから日本に輸入される蜂蜜のレッテルには、蜜源植物の名が Rata だの Manuka だのと、現地名(マオリ語の名称)で書いてあるだけで、学名がないので正体がわからなかったが、本版でオーストラリアとニュージーランドに固有な植物や動物の現地名から学名を知ることができる。また *Nothofagus* は Birch の項にいれてあるので、これが現地での英語名として使用されていることがわかったし、ナンヨウスギは *Hoop-pine*, *Coriaria* は Tutu の由。(久内清孝, 佐藤正己)